

# 狩野山雪の作品における構図の特色と儒教の影響

Compositional Features and the Influence of Confucianism in the Works of Kano Sansetsu

アート／論文

地域キュレーションコース

東 瑞穂

Mizuho Higashi

## ◎本研究の目的・研究手法

狩野山雪は狩野派の絵師として、江戸時代16～17世紀の京都を中心に活動した。代表作は天球院方丈障壁画の作品や「雪汀水禽図屏風」で、儒者との関わりがあったことから儒学を扱った作品も描いている。

本研究では、狩野山雪と父の山楽、及び儒者たちとの交流についてまとめるとともに、初期から後期までの作品について構図分析を行うことで作品に見られる特色を明らかにし、儒教がそれらにどのように影響しているのかを検討した。

## ◎先行研究の課題点

山雪の幾何学的な構図がはっきりと見られる中期以降の作品では、構図の分割といった研究手法が用いられている。しかし、いまだ山雪の画業すべてにこうした研究がなされているわけではなく、初期の作品についてはその作風などもはっきりと論じられていない。

また、「和」を主題とした作品や山雪の初期の作品では、絵画における構図形式の重要性を説き、構図の分割によって研究に新しい可能性を生み出した源豊宗氏の手法は使われておらず、構図とモチーフの結びつき、それを支える構想については不明である。

さらに、初期から中期の作品にかけては作品数が少ないことに加えて、中国絵画の影響や儒教がどの程度作品に影響しているのかは研究が進んでいない。

## ◎研究手法

自身で行った構図分析と先行研究を比較し、共通点や相違点を述べ、山雪画の特徴を明らかにする。この際、画家の視点を考慮しながら画面の中心を定め、縦4×横4の16分割と対角線を基本とし、赤線で示した。また、横の線は上からA、B、Cとし、縦の線は左からa、b、cとした。二等辺三角形や三角形といった単純な図形が作品内に見られる場合には青線、垂直・水平が見られる場合は黄線、緑線で示した。

また、『論語』注釈として最も有名な朱子の『論語集註』や『易経』などを参考に、儒教がどのように山雪の交流や画法に影響を与えたのかも検討した。

## ◎画面の分割による作品の分析と結果

基本的に山雪画は初期、中期、後期を通して、画面の中心点を基準にして画面を縦横に等分割し、その区画を基に余白をつく

り、対角線を意識してモチーフを配置するという構成になっていることを指摘した。

初期では画面の上と左右どちらかの4分の1を余白として設け、対角線を利用した厳格な構図分割を行っていることが分かった。

中期では対角線を用いた画面構成に大きな変化は見られないものの、初期に見られた余白部分にまでモチーフが描かれるようになってくる。

後期では中期で残されていた余白がさらに小さくなり、モチーフは画面いっぱいに広げられるようになった。対角線と平行な斜辺を意識したモチーフの配置が顕著となり、写実性を感じさせる描き方をすることによって、それまでの理路整然とした印象だけでなく、生き生きとした躍動感さえ作品にもたらしたと見ることができる。

以上の構図分析から、山雪の作品は初期から後期へと安定感を残したまま、各モチーフは静謐な描き方から生物としての生き生きとした情感を持つ描き方へと変化したことを論じた。

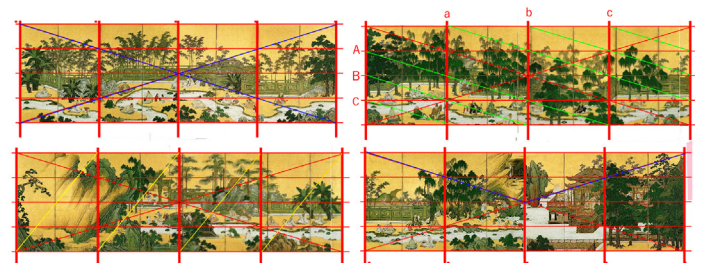


図)「蘭亭曲水図屏風」 狩野山雪／八曲二双 紙本金地着色  
京都国立博物館、毎日新聞社編『特別展覧会 狩野山楽・山雪』／毎日新聞社／2013年

## ◎儒教の影響に関する考察

儒教の中で畏怖すべきものとして神的に扱われた自然は、次第に本来の意味として用いられることが増え、人間も自然と一線を引いた存在から積極的に自然へと関わろうとする存在へと変化している。

これらの変化は、山雪の構図の変化にも見られると考えられ、モチーフの広がりや、当初一線を引かれた自然と人間の関係から、徐々に自然と人間が交わったことを示しているのではないかと考えている。また、山雪が江戸の新様式と、山雪と同時期の狩野派の様式と逆行するように、余白が段々と少なくなり、モチーフに躍動感が増していくような作品を制作したのは、自然への回帰とみなせるのではないかと述べた。